

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520206

研究課題名(和文)『新古今和歌集』の研究

研究課題名(英文)a study of Shinkokin-wakashu

研究代表者

渡部 泰明(WATANABE, YASUAKI)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：60191813

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：8番目の勅撰和歌集『新古今和歌集』につき、『新古今和歌集』の文献学的研究・『新古今和歌集』の注釈学的研究・『新古今和歌集』の古注の研究の三つの柱を中心に研究を進め、それを基盤として、主要な中世歌人の様式への意識を分析し、和歌詠作の方法を解明した。また、『百人一首』について考察し、古代・中世の和歌史を記述する試みを行った。

研究成果の概要(英文)：I made a study of philology, explication and ancient notes of the eighth imperial waka anthology 'Shinkokin-wakashu', and being based on that study, about some principal waka poets, I analyzed their consciousness of waka-style, and determined their method of making waka. And I made study of 'Hyakunin-issshu', and described waka-history of ancient and medieval period.

研究分野：日本文学、和歌文学、中世文学

キーワード：新古今和歌集 百人一首 方法

1. 研究開始当初の背景

『新古今和歌集』については、すでに多くの研究が蓄積しているとはいえ、その内容の豊富さから、まだ探索は十分とはいえない。とくに本文についての網羅的な調査、精密な注釈、古注釈の利用の点で、まだ未開拓の領域を残している。

2. 研究の目的

(1) 『新古今和歌集』の文献学的研究、(2) 『新古今和歌集』の注釈学的研究、(3) 『新古今和歌集』の古注の研究を行い、それに基づいて、主要な中世歌人たちの方法を解明する。

3. 研究の方法

(1) 『新古今和歌集』の伝本の網羅的な調査を行い、(2) 『新古今和歌集』の和歌に詳細な注釈を施し、(3) 『新古今和歌集』の古注を幅広く調査・集成し、(1)～(3)の成果に基づいて、主要な中世歌人たちの方法を分析・考察する。

4. 研究成果

本研究における研究成果は、大きく三つの領域にわたっている。(1) 中世を中心とする歌人の方法論の解明、(2) 『百人一首』の注釈学的研究、(3) 和歌史記述の構築の3点である。以下、それぞれの成果について述べる。

(1) 中世を中心とする主要歌人の方法論については、和泉式部、源俊頼、藤原定家、兼好法師、世阿弥の5作家について、成果を発表した。

和泉式部については図書「和泉式部の方法」を発表した。自分を他者のような目で見つめる作者の視線に端的に表れる、主体が分裂し、二重化するような和泉式部の歌の固有の方法を析出し、それが中世歌人の方法に継承されていることも合わせて指摘した。源俊頼については、論文「和歌の本意 『俊頼髓脳』をめぐって」・図書「規範」・「歌のかたち 源俊頼の方法」を発表した。論文・図書は、『俊頼髓脳』の「歌題と詠み方」の箇所を行文を詳細に分析し、そこに、俊頼の創作体験を生かした、独特な表現意識が見られることに注目し、ここに「縁語的思考」と名づける、歌ことばの相互関係を、過剰さや空白をも含んで流動的に捉える想像力を抽出した。縁語的思考は、

様式と主体の間に介在して、様式を基盤として独自の想像力を発揮するような創作の母胎となるものである。加えて図書では、それに密接に関わる俊頼の擬人法について考察し、これが「述懐」的な発想と深く関わり、新たな風景を創造していることを論じた。

藤原定家については、図書「藤原定家の百人一首歌」を刊行した。定家の自讃した「来ぬ人をまつ帆の浦の夕なぎに」の歌をめぐって、とくに建保年間前後の、言葉の連想を生かした方法を指摘した。兼好法師については、論文「徒然草と兼好法師集」・図書

「因果の転倒」・図書「ことばによってどのように心が表現されるのか」を発表した。論文は、兼好の散文『徒然草』に、「実践的無常観」とも呼ぶべき、無常を積極的に人生の指針として生かそうという思想を看取したうえで、そうした思想の根底にある確信が、詠歌実践の体験によって育てられたと指摘した。図書は、上記の「実践的無常観」が、「因果の転倒」と呼ぶべき独特の発想を生み出していることを論じた。図書は、その視点を展開させ、『徒然草』の底流に予言される感覚が存在することを明らかにした。

世阿弥については、論文「高砂」の和歌的世界」を発表した。世阿弥の代表的な祝言能「高砂」の劇作のレトリックを分析することで、そこに「縁語的思考」が見られることを指摘した。

(2) 百人一首論については、論文「百人一首選歌の謎」および単著『絵でよむ百人一首』を公刊した。論文は、藤原基俊の「ちぎりおきし」の歌を分析し、背後の事情を掘り取る緊密な言葉の相互関係に着目し、それが創作者定家の方法に通じるものであることを指摘した。単著は、『百人一首』すべての歌について、注釈を施した。その際、古注を利用することで、定家の解釈・中世における解釈を明らかにすることにつとめ、これと作者自身の意図との違いに注意し、多元的

な解釈が可能であることを明らかにした。

(3) 和歌史論としては、図書 「新古今集と中世和歌」・図書 「歌枕の世界」等・図書 『古典和歌入門』・図書 「はじめに」を公表した。すべて、和歌の歴史を大きく展望しつつ、その動態を把握することを目指したものである。図書 は『新古今和歌集』が切り開いた世界が中世の和歌史全体にどのように継承され、展開しているかについて、その流れを重視して記述した。図書 は、古代から中世にかけての和歌史のうち、歌枕や季節感を表す歌語、九相図の絵画との関連などのトピックを中心に解説した。図書 は、古代・中世において秀歌とされるもの48首につき、その魅力を平易に記述したものである。中等教育における教材となるよう、研究成果の社会還元を目的とした著書である。図書 は和歌のレトリックを平易に解説したもので、これも中等教育での活用を前提に編集した図書である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

渡部泰明、徒然草と兼好法師集、国語と国文学、査読有、87巻5号、2012、pp.112 124

渡部泰明、百人一首選歌の謎、ユリイカ、査読無、1月臨時増刊号、2012、pp.81 90

渡部泰明、和歌の本意 『俊頼髓脳』をめぐって、能と狂言、査読無、12号、2014、pp.36 45

渡部泰明、「高砂」の和歌的世界、観世、査読無、82巻2号、2015、pp.24 32

[学会発表](計 5件)

渡部泰明、和泉式部の人称性、対論和歌の視線、INALCO(パリ市)、2013年3月30日

渡部泰明、和歌の本意、能楽学会(早稲田大学)、2013年5月26日

渡部泰明、歌の かたち 源俊頼の方法 東京文化財研究所国際シンポジウム、2014年1月11~12日

渡部泰明、『百人一首』と定家、日本女子大学国際シンポジウム、2014年3月22日

渡部泰明、和泉式部から西行へ、愛知県立大学一人称研究会、2014年3月31日

[図書](計10件)

渡部泰明他、笠間書院、平安文学をいかに読み直すか、2012、pp.184 210

渡部泰明他、ミネルヴァ書房、日本文学史 古代・中世編、2013、pp.189 204

渡部泰明他、放送大学教育振興会、和歌文学の世界、2014、pp.11 50および78 136

渡部泰明他、岩波書店、特別講義 日本文学の表現機構、2014、pp.77 154

渡部泰明、岩波書店、古典和歌入門、2014、215

渡部泰明他、東京大学出版会、人文知1 心と言葉の迷宮、2014、pp.119 138

渡部泰明他、笠間書院、これからの国文学研究のために 池田利夫追悼論集、2014、pp.531 545

渡部泰明、朝日出版社、絵でよむ百人一首、2014、224

渡部泰明他、笠間書院、和歌のルール、2014、pp.6 15

渡部泰明他、平凡社、「かたち」再考 開かれた語りのために、2014、pp.183 193

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡部 泰明 (WATANABE, Yasuaki)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号： 60191813

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()

研究者番号：